

すべての学生が ハッピーになれる 大学をめざして。

学生支援GP

「インクルージョン社会をめざした大学づくり」

文部科学省の平成19年度新規事業

「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」(学生支援GP)で
本学の「インクルージョン社会をめざした大学づくり」が選定されました。

特別なニーズをもつ学生を支援するとともに、

支援する側の学生も共に人間の成長を促進する「共有」が最大のテーマです。

「インクルージョン」とは「包摂(包み込むこと)」の意味。

だれも排除されることのない社会の実現をめざして、

インクルージョン社会の担い手となる学生たちを育てます。

選定されたプログラムについて、

伊藤真知子副学長にうかがいました。



学生支援GP

「インクルージョン社会をめざした大学づくり」

～公益大生のハッピーを支援するプログラム～

伊藤真知子 東北公益文科大学教授

学生支援の取組が評価され 学生支援GPに選定

「公益学」の教育研究と「大学まちづくり」を理念に掲げる東北公益文科大学（以下、公益大）は、これまで、熱心に学生支援に取り組んできました。学生支援の理念・目標としているのは、①地方小規模大学ならではのきめ細かな支援、②「大学まちづくり」の理念のもと、地域との多様な連携による学生支援、③「公益」という理念を実現する人材を育てる支援です。

今秋から、公益大では、新しい学生支援プログラムが開始されています。名づけて、「インクルージョン社会をめざした大学づくりー特別なニーズをもつ学生への『共育』支援を通して」。平成19年度から文部科学省が開始した「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（略して学生支援GP）に、約4倍の競争率のなかを、選定されました。

学生支援GPとは、「入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援のプログラムのうち、学生の視点に立った独自の工夫や努力による優れた取組（Good Practice）」のことです。全国の大学・短大・高等専門学校が実施するプログラムのなかから優れたプログラムが選定され、広く社会に情報提供するとともに、学生支援機能の充実を目的として、財政支援が行われるものです。文部科学省は、平成19年度、70校に対して16億円の財政支援をすることとしています。

ハッピーな学生生活のための きめ細かな学生支援

公益大がこれまで行ってきた、一人ひとりを大切にする「きめ細かな支援」は、入学直後の羽黒山合宿に始まり、少人数による「公益自由研究」（基礎ゼミ・1年前期必修）、そして、自由研究担当教員による2年終了時までの担任制へとつながっています。3・4年次は専門演習（ゼミ）担当教員が卒業論文の指導や就職活動への支援などを通じて、卒業までの生活や修学状況を見守ります。教員ごとに、オフィスアワー（学生が研究室を自由に訪れ、質問したり、相談したりすることができる時間帯）が設定され、活用されています。また、大学事務局はオープンカウンター方式となっており、学生が気軽に質問・相談できて、職員と学生の距離が比較的近いといえます。

4年間の学生生活のなかで、心身の不調や生活面での問題、精神的な悩みなどがかかえることはよくあることです。そのような学生には、健康管理室の看護師（保健師）や学生相談室のカウンセラーが相談相手となり、個別に対応しています。必要に応じて相談相手となり、教務学生課、キャリア開発センターなどと連携を図って学生自身の問題解決を支援するとともに、医療機関等への紹介など、学外の専門機関との連携も進めてきました。



Ito Machiko

東京都生まれ。上智大学文学部社会学科卒。同大学院文学研究科後期博士課程退学。現在東北公益文科大学副学長。専攻は女性学、社会学。



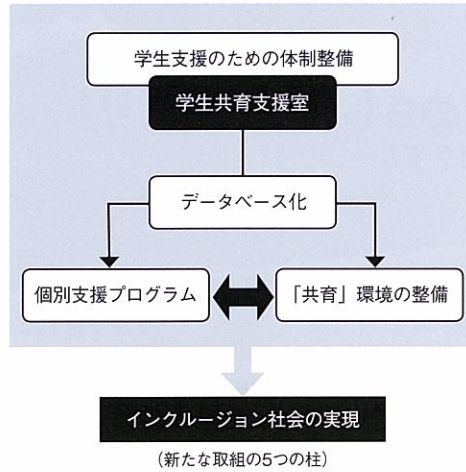
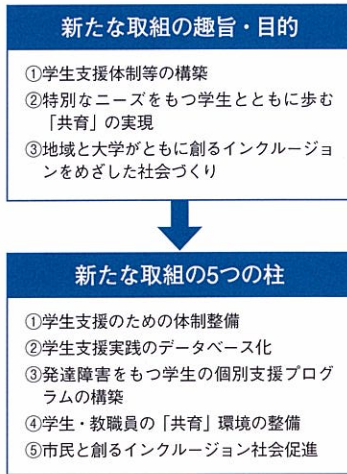
9月6日、学生支援GPへの採択を記者発表。本プログラムについての説明を行う。



教職員の勉強会（FD）は随時開催されている。学生のニーズや支援方法について意見交換。



留学生とともにキャリア形成について学びあう「おしんフォーラム」。



インクルージョン社会とは だれもが包みこまれ 幸せに生きられる社会

新たなプログラムのキーワードであり、タイトルにもなっているのが、「インクルージョン社会」という言葉です。これは、すべての人が、排除されることなく、包み込まれ、幸せに生きることのできる社会を意味しています。社会全体がそのような社会となっていくことをめざして（これが公益に満ちた社会の一つの姿でしょう）、大学のなかからその実現を図ろうとするものです。

そのためには、外国人留学生も含めた特別なニーズをもつ学生、とりわけ障害（身体障害・精神障害・発達障害など）をもつ学生たちが排除されることなく、毎日を幸せに過ごすことのできるキャンパス環境をつくっていくことが求められます。

特別なニーズをもつ人が「当たり前」に過ごせるキャンパスであることが重要なのです。そうであれば、いわゆる一般の学生たちもまた、「当たり前」に過ごすことができるからです。

支援されるばかりでなく 支援することによって 学生は成長する

新たなプログラムにおけるキーワードの2つ目は、「共育」です。これは、文字通り、特別なニーズをもつ学生とそれを支援する学生とが「ともにそだつ」ことを意味しています。つまり、特別なニーズをもつ学生への支援を教職員だけが行うのではなく、教室やカフェテリアや廊下などでの日常的な学生同士の支え合い、すなわち「ピア・サポート」（ピアとは仲間の意）が重要であるということです。

特別なニーズの有無にかかわらず、学生生活には、「支援される」ことを必要とする場面があります。同時に、学生はだれでも（特別なニーズをもつ学生ももちろん）「支援する」立場にもなり得るのです。相互に「支援される」「支援する」経験を通じて、学生たちは人間的な成長をとげ、自立への歩みを一步一步進めていくことでしょう。

今後の具体的なプログラムとして、1、2年生を対象とする授業「市民共生論」の開講や、ニュージーランド短期留学の

なかで特別なニーズをもつ学生と支援学生とがともに参加するリーダー養成事業などが予定されています。「支援する」手法や技術を身につけることをつうじて、支援する気持ちを育み、「他者を支援できる」人材へと成長していくことをめざします。

学生同士の「共育」に加えて、学内において教職員と学生とが「ともにそだつ」こと、さらに、地域の市民と大学の教職員・学生が「ともにそだつ」という意味も、「共育」というキーワードにはこめられています。

このような「共育」の環境づくりのために、啓発パンフレットを作成・配布したり、教職員を対象とする「特別なニーズをもつ学生支援のための連続講座」等を実施していきます。

個別支援プログラムで 具体的に支援していく

3つ目のキーワードは、「個別支援プログラム」です。特別なニーズをもつ学生、とくに障害をもつ学生に対する具体的な支援は、個別支援プログラムを作成し、それに沿って進めていきます。とりわけ、



20棟(177人)あるドミトリー(学生研修寮)にはバリアフリーに対応した2棟がある。



写真はバリアフリー棟の設備。共同生活を通して寮生同士、また地域から公益を実践的に学ぶ。



学生が企画したユニバーサルデザイン(UD)の勉強会。UDグッズを使った体験コーナー。



大切なのは
みんながハッピーな学生生活を送ること。
学生支援のためのさまざまなプログラムに挑戦しています。

集団生活のなかで臨機応変にふるまうことが苦手だったり、人間関係でつまづきがちであったりというような、社会性にかかわる障害（発達障害）をもつ学生への支援に取り組むことが、このプログラムの大きな特長です。日常生活支援、学修上の支援、就労支援等を通じて、障害をもつ学生たちの自立と社会参加、そして人間的成長を促していきます。

ピア・サポートや「共育」環境の整備を進めるとともに、高等学校をはじめとするさまざまな学外の関係機関や専門家との連携・ネットワークを積極的に構築します。さらに、地域社会における障害をもつ方々や一般市民を対象とする公開講座等を実施して、発達障害等の理解を広げ、障害をもつ人たちとともに生きる「インクルージョン社会」の考え方を広めていきます。

学生共育支援室には学生の憩いの場（サロン）を設置

プログラム実施の中心となるのは、「学生共育支援室」（以下、支援室）という新たな組織です。室長のもとにコーディネーター、カウンセラー、ソーシャル

ワーカー、そして事務職員が配置されています。

支援室は、学生への個別対応、そのための教職員等との連携など、学内におけるプログラムの企画・実施を行います。さらに、学外の高等学校、医療機関等との連携を強め、公開講座（地域の障害をもつ方々や一般市民を対象）等を企画・実施していきます。今年から4年間にわたって、全学的に、そして総合的・計画的にプログラムを推進していく役割の中核を担う組織です。

支援室には、学生向けのサロンも開設しています。特別なニーズをもつ学生、支援する学生などが、自由に入出入りして、打ち合わせしたり、交流したりできるようになっています。ハッピーになる時間をより多くもてるように、学生たちの居場所として、おいに利用してもらいたいものです。

みんながハッピーになれる大学をつくり社会へとひろげよう

このプログラムがめざしているのは、第一に、学生を共生社会の担い手として育成していくことです。学生同士の「支

援される」「支援する」活動を通じて、他者を「支援できる」人材を育てていきます。これはまさに、「公益を实践する人材」を育成し、社会に送り出すという公益大の教育目標そのものの実現につながることです。

第二に、インクルージョンをめざす地域社会づくりです。すべての人が排除されることなく幸せに生きることのできるインクルージョン社会の実現を、まずは庄内地域における「大学まちづくり」のなかで進めていきます。さらに日本全国へと広げていくことを夢見ています。

最後に、もっとも大切なことはすべての学生を包み込む大学づくりをめざすことです。勉強や研究はつらく苦しいことが多いけれど、喜びもあるはず。だけれども、学ぶ喜びや楽しさを味わえる公益大となるよう、すべての教職員が力をあわせて、学生を支援していきたいと思っています。

生き生きと輝く学生たちの顔を見ることは、何にも増してうれしく、ハッピーなことなのであります。



講義の内容をリアルタイムで聴覚障害者に伝える筆記通訳の訓練講座「ノートイク養成研修」。



ニュージーランドをはじめ海外短期留学に特別なニーズをもつ学生も含めて参加できるよう支援。



バリアフリーに関する物的・人的設備全体について実際に障害者とともに調査する「福祉マップ」の製作。